

膚は拒絶された。免疫組織染色の結果、凍結保存群、低温保存群ともに IgG, IgM, C3 の沈着を認めた。しかし低温保存群は凍結保存群と比較し IgG, IgM, C3 ともにより高度な沈着を認めた。

9. 急性心筋梗塞の心筋傷害における nitric oxide と peroxynitrite の関与

(第二病理) 下條 隆・石山 茂・
竹田和代・西川俊郎・笠島 武

To investigate whether the nitric oxide (NO) is involved in the myocardial damage in acute myocardial infarction (AMI), ventricular myocardial tissue of autopsied cases with myocardial infarction was examined by immunohistochemical staining with anti-inducible NO synthase (iNOS) and anti-nitrotyrosine antibody.

The damaged residual myocardium were positively stained with anti-iNOS antibody and anti-nitrotyrosine antibody in AMI. These findings were not obtained in the myocardial tissue of patients who died shortly in the early stage when myocardial cells reveal contraction band necrosis with minimal inflammatory cell infiltration. And also they were not obtained in patients with old myocardial infarction.

Since iNOS development accompanied by cell infiltration was noted in the damaged myocardium and nitrotyrosine was also disclosed in the same area, it is suggested that not only NO but also peroxynitrite is involved in myocardial damage in AMI.

10. Menkes 病剖検小脳における superoxide dismutase の免疫組織化学的検討

(第一病理) 柴田亮行・小林慎雄

Menkes 病におけるフリーラジカル傷害の関与を探るため、剖検小脳を用いて superoxide dismutase (SOD) の局在を免疫組織化学的に検討した。死亡時 1～2 歳の Menkes 病と対照群各 5 例の小脳のパラフィン切片に免疫染色を施した。一次抗体にはヒト Cu/ZnSOD ならびに MnSOD に対するウサギ抗血清(山梨医大小児科朝山光太郎博士から恵与)を用いた。Cu/ZnSOD は対照例の Purkinje 細胞に陽性、Menkes 病例で陰性であった。MnSOD の免疫活性は対照例では弱かったが、Menkes 病例では Purkinje 細胞に高度であった。Menkes 病では銅欠乏により銅要求酵素で

ある Cu/ZnSOD や cytochrome c oxidase の活性が低下するといわれており、電子伝達系からの superoxide radical の発生量増大によりミトコンドリア型 MnSOD が誘導されると考えられた。

11. 東京女子医大におけるレニン産生腎傍系球体細胞腫の第 1 例

(第二内科) 田辺晶代・成瀬清子・
長谷充康・吉本貴宣・田中正巳・
新井桂子・成瀬光栄・出村黎子・出村 博
(泌尿器科) 東間 紘

傍系球体細胞腫はこれまでに約 45 例の報告があるのみの極めて稀な二次性高血圧である。今回我々は、径約 8mm の傍系球体細胞腫を経験したので報告する。

症例は 31 歳男性。24 歳時に高血圧 (160/110 mmHg) を指摘され、以来降圧剤の服用にて血圧のコントロールは良好であった。31 歳時血漿レニン活性 (PRA) を測定したところ高値 (54.4 ngAng I/ml/hr) であり、生食負荷時 PRA の抑制不良が認められた。MRI にて右腎上極に径約 8mm の腫瘤陰影を認め、右腎静脈血中 PRA が対側に比し明らかに高値であったことから、傍系球体細胞腫を疑い右腎臓部分切除術を施行した。摘出組織は病理学およびレニン抗体による免疫組織学的検討から、傍系球体細胞腫と診断された。

これまで傍系球体細胞腫は比較的大きな腫瘍の報告が多いが、本症例のような小腫瘍で、術前に局在診断が可能であった例は少ない。

12. クッシング症候群副腎皮質病変の病理学的検討

(第二病院病院病理科) 相羽元彦・
飯塚英治・五十嵐昭喜・橋本正徳・須賀道恵

ヒト aldosterone synthase cytochrome P-450 (P-450_{aldo}) と 11 β hydroxylase (P-450_{11 β}) に対する家兎 polyclonal 抗体 (慶応大医化学 三谷講師供与) を用いて、副腎新鮮凍結切片を envision system により免疫染色し、種々の病態のクッシング症候群の副腎皮質を原発性アルドステロン症と比較した。

〔結果〕コルチゾル産生副腎皮質腺腫は P-450_{11 β} は陽性だが P-450_{aldo} は陰性、ACTH 非依存性大結節性過形成性や原発性副腎皮質小結節性異形成の結節部、ACTH 依存性過形成性の索・網状層も同様の染色 pattern を示した。アルドステロン産生腺腫は P-450_{aldo} と P-450_{11 β} が両者とも中等度の染色性を示した。非腫瘍部の球状層は、種々の割合で (僅かに単状/楔状/比較的多く破線状に) P-450_{aldo} の強い染色性と P-450_{11 β} の陰性または弱い染色性を示した。

〔考察と結論〕 P-450_{ald}と P-450_{i1β}の免疫染色は副腎皮質組織におけるアルドステロン産生系とコルチゾル産生系の鑑別に有用である。

13. 14年間に経験した甲状腺濾胞癌84例の臨床病理学的特徴

(内分泌外科, *病院病理科)

山下共行・和田祐和・山崎喜代美・
飯原雅季・小原孝男・河上牧夫*

甲状腺濾胞癌は遠隔転移を起こしやすいが、診断は困難で治療法の選択に迷うことが多い。遠隔転移を起こしやすい濾胞癌の病理学的特徴を検討した。

〔対象〕 14年間に治療した濾胞癌84例。

〔結果〕 84例中31例 (37%) に遠隔転移を認め、うち8例 (9%) が原病死した。肉眼浸潤形態上、広汎浸潤型25例中13例 (52%) に転移がみられた。被包型53例中転移は14例 (26%) であったが、被膜の厚さで分けると厚いものに転移が多かった (40%)。低分化癌は22例で、そのうち73%に転移があり、23%が原病死した。

〔結語〕 遠移を起こしやすい濾胞癌は、広汎浸潤型、低分化癌で、これらに対しては甲状腺全摘と術後¹³¹I全身シンチを選択すべきである。

14. アルコール性肝障害における肝細胞癌合併の臨床病理学的検討

(消化器内科) 谷合麻紀子・橋本悦子・
野口三四朗・石黒典子・林 直諒

アルコール性肝障害 (ALD) 単独で肝細胞癌 (HCC) を合併した症例について非癌肝の病理組織を中心に検討した。対象は過去6年間に HCC と診断された578例中、HBs 抗原、HBV-DNA、HCV 抗体、HCV-RNA の全てが陰性で肝炎ウイルスの関与が否定され、非癌

部肝組織の得られた18例 (HCC 診断時平均年齢60~70歳、男女比17:1) である。非癌肝の組織診断はアルコール性肝炎2例、アルコール性肝線維症6例、肝硬変10例と肝線維症と肝硬変が多かった。ALD に特徴的な組織所見の出現頻度は、脂肪化60%、pericellular fibrosis 77%、perivenular fibrosis 72%、好中球浸潤60%、ballooning 33%、Mallory 小体33%、鉄沈着28%と「アルコール性」単独として矛盾しない所見であった。また、HCC は単発例が多く、分化度では中分化型が多かった。

15. 増殖組織における DTA 分化

(病院病理科) 河上牧夫・古田幸代・
桜田 実・関根延穂・金室俊子・
長谷川業嗣・伊藤隆雄・野並裕司

腫瘍の組織分類は診断医の間、また施設間で少なからず齟齬を来す場合が少なくない。そこで乳腺、甲状腺、肺、消化管の腫瘍性増殖病変の増殖パターンの解析を通して新たな類位 (taxon) を求めた。

粘膜表面のみならず、管上皮面に対して取る細胞増殖の態度、増殖ファミリー、管伸展性、先端増葉力の観点から分類を試みると原則として表面増大性の外向型 (D)、管進展型 (T)、増葉型 (A)、離上皮型 (E) の基本四型が区別される。これらの分節分化は系統発生における細胞の自己組織化の列序性を反映し、D型は古く、かつ組織液親和性 (lymphaffinity) が高いのに比し、A型は血管発生後のため血液親和性 (hemoaffinity) が高い。かつ血管との酸素分圧勾配上の細胞分化の観点からも展開すると機能動態をよりの確に表現することが可能となる。即ち増殖形態は本来的に D-T-A-E-cluster 形成性であり、腫瘍組織は所詮その defective な表現形態に外ならない。